

# 英米文学鳥類考：カッコウについて

梶田 隆宏

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

(A Study of Birds in English and American Literature: The Cuckoo)

Takahiro MASUDA

## (一)

英国では4月の中旬、我が国では5月の上旬になれば、野や山でカッコウが鳴き始める。<sup>1</sup> その鳴き声は誰が聞いても直ぐに分かる、文字通り「カッコウ、カッコウ」の繰り返しであり、単調ながら親しみの持てる、口調の良い調べである。この鳥は春に渡来して夏に去ってゆくホトトギス科改めカッコウ科<sup>2</sup>の渡り鳥で、越冬地はアフリカや南アジアである。<sup>3</sup> 最近の報告によれば、カッコウ科には「130種」<sup>4</sup> が分類されており、「その分布地域はカナダ、南アメリカ大陸の南部、サハラ砂漠、アラビア、極地を除く全世界に及んでいる」<sup>5</sup> という。これほど種が多く広大な分布地域を有するカッコウ科の中で、最もよく知られている鳥がカッコウである。ちなみに、我が国でカッコウ科の鳥と言え、カッコウ (European Cuckoo)、ホトトギス (Little Cuckoo)、ツツドリ (Oriental Cuckoo)、ジュウイチ (Fugitive Hawk Cuckoo)<sup>6</sup> の4種で、その中で最も数が多いのはカッコウである。

ツツドリやジュウイチとは一体何のことか皆目分からぬ人でも、カッコウと言え、文字通り「カッコウ、カッコウ」と鳴く鳥であるぐらいことは誰でも知っている。洋の東西を問わず、この鳥に対して同じような呼び方をしているのは、その確かな証左である。カッコウのことを英語ではクッカー (Cuckoo)、フランス語ではクークー (Coucou)、ドイツ語ではクックック (Kuckuck)、スペイン語ではクコー (Cuco) と言うが、いずれもこの鳥の鳴き声から付けられた名前である。ちなみに、我が国でもカッコウの当て字として古来「郭公、閑古鳥、喚子鳥」<sup>7</sup> 等の漢字が用いられてきたが、これらの呼び名がこの鳥の鳴き声に由来していることは今さら断るまでもあるまい。それは『古今和歌集』や『新古今和歌集』では「郭公」の当て字が用いられ、それを当時の人々は「ホトトギス」と読んでいたにせよ、この漢字の音読みは正しく「カッコウ」そのものである、という事実を見ても明らかである。とはいえ、ではカッコウとは一体いかなる鳥なのか、と改めて問われたとき、即答できる人は正直いって、そう多くはないのも事実であろう。西洋版の『野と森の鳥』は、この鳥について次のように述べている。

Although much celebrated in legend, verse and song, and generally welcomed as one of the messengers of spring, the cuckoo has a number of unendearing habits, and is not popular with other birds. It builds no nest of its own, but blending opportunism and guile, deposits its eggs in the nests of other species, who promptly rear the baby cuckoos as their own. If necessary, eggs which are already lying in the selected nest are removed, then destroyed or swallowed whole.

Compared with the size of the mother bird — about thirteen inches long —

the cuckoo's eggs are small, the colour varying from white to green or buff and often similar to the egg of the chosen host. The newly-hatched cuckoo will show no gratitude either to its foster-mother or her brood. Unhatched eggs will be hoisted to its broad back and tumbled out of the nest. Apparently unsuspecting, the foster-mother will continue to feed the young cuckoo, which already dwarfs her in size, until after it is able to fly.

Among more than one hundred species chosen for this unrewarding work are the meadow pipit, hedge sparrow, robin, reed warbler and yellow wagtail. The Fool, in Shakespeare's *King Lear*, remarks,

‘The hedge sparrow fed the cuckoo so long,  
That it had its head bit off by its young.’

The cuckoo, nevertheless, has its useful side, as it consumes many harmful insects, including hairy ones rejected by all other birds. Its predominating colour is slate-grey, the under parts being whitish and darkly barred. The name is derived from the familiar, melodious call of the male; the call of the female is a bubbling sound, rarely heard. The bird is a summer visitor to the British Isles, wintering in Africa. The adult birds frequently leave the country some weeks before their young, who experience little difficulty in finding their own way to winter quarters. They are strong fliers, and on the wing may easily be mistaken for sparrowhawks.<sup>8</sup>

(カッコウは、伝説や詩歌で大いに賛美され、一般には春の使者に属する鳥として歓迎されているが、多くの疎ましい習性を有し、他の鳥からは嫌われている。自分の巣を造らずに、ご都合主義と狡猾さを混ぜ合わせた上で、他の鳥の巣の中に自分の卵を産みつけ、いち早くその鳥に自分の雛として育てさせる。必要ならば、すでに仮親の巣に産まれている卵を持ち去って破壊するか、それとも丸ごと飲み込んだりする。

約13インチ(33センチ)という母鳥の大きさに比べれば、カッコウの卵は小さく、その色は白から緑や黄褐色ならびに産みつける相手鳥の卵の色にしばしば似た色と多岐にわたっている。孵化したばかりのカッコウの雛は、仮親に対しても又その子孫に対しても、感謝の念などさらさらしない。その広い肩に孵化していない仮親の卵を乗せ、巣の外に放り出してしまふ。仮親は、明らかに何一つ疑いを抱かず、自分よりもはるかに大きなカッコウの雛を巣立ちの後まで養い続ける。

この報われない仕事に選ばれる百種以上の鳥の中に、マキバタヒバリ、イワヒバリ属のヨーロッパカヤクグリ、それにツメナガセキレイがある。シェイクスピアの『リア王』の中で、道化は次のように述べている：

「小鳥が郭公の雛解し、あんまり長く養って、  
とうとう首を食切られた。」

とはいえ、カッコウは益鳥でもある。というのも、他の鳥が全て見向きもしない毛虫を含めて、多くの害虫を好んで食べるからである。カッコウの主色は明るい黄緑がかった灰色であるが、腹部は白みがかっていて黒ずんだ縞がある。カッコウという名前は、誰でも知っ

ている、耳に快い、雄の鳴き声に由来している。一方、雌は「鋭い声で、ピッ、ピッ、ピッ」<sup>9</sup>と鳴きだけで、人がこの鳴き声を耳にすることは滅多にない。カッコウは夏にイギリス諸島に渡来し、アフリカで越冬する。親鳥たちは巣立ちした子供よりも数週間早く飛び立つ。でも若鳥たちは、冬の越冬地に至るコースを見つけるのに大して苦労はしない。カッコウは抜群の飛翔力を有し、飛んでいる姿は小型のタカに大変よく似ているので、容易に見間違いを犯す可能性がある。）

簡潔にまとめてみると、カッコウとは（1）ハトよりも少し大きい渡り鳥で、（2）春の到来を告げ知らせる喜びの鳥として一般に歓迎され、伝説や詩歌の中でも大いに賛美されてきた反面、（3）托卵性という「実に厭うべき習癖」<sup>10</sup>、つまり他の鳥の巣に卵を産みつけ、その鳥に孵化・育雛させるという「きわめて特異な習性」<sup>11</sup>を有するが故に「不吉の鳥」<sup>12</sup>として忌み嫌われてもきた、と言えよう。この托卵性に秘められた悪夢の世界を白日の下にさらしたのが、ここ百年の研究成果である。『朝日＝ラルース 世界動物百科（鳥類）』はカッコウの雛について次のように述べている。

イギリスのチャンス博士（Chance）ら数多くの研究者が、20世紀のはじめからさまざまな観察を重ねて、次のことがはっきりしてきた。カッコウのひなは、生まれて12時間もたてば、自分のからだに触れるものはなんでも押しのけるという本能を持っており、両肩のあいだの背のくぼみに仮親の卵やひなをのせて、信じられないほどの力をふるい、両あしをふんばってあとずさりしながら運んでいき、次々と巣の縁の外に放りだす。こうしてついに、巣を独占するのだ。<sup>13</sup>

<托卵性の鳥＝カッコウ科の鳥>というのは世間一般の常識であるが、しかしこの科の中で托卵性を有するのは三分の一足らずの「50種」<sup>14</sup>ほどであり、その約50種のうちヨーロッパで知られているのは「2種」<sup>15</sup>のみである。この「托卵性」という特異な習性と、一度聞けば忘れられない、いわゆる「カッコウ、カッコウ」という「鳴き声」が130種もあるカッコウ科の鳥の中で、カッコウを最も名の知れた存在にしているのである。<sup>16</sup>と見てくれば、カッコウとは喜ばしい「春告げ鳥」である反面、厭わしい「托卵鳥」でもあることは明白であり、したがってイメージやシンボルの世界では、この鳥もまたフクロウやカラス、ハトと同様、吉凶あざなえる両義的な存在である、と言えよう。以上の点を踏まえた上で、カッコウについての考察を進めてゆきたい。

## （二）

最初に、ギリシア神話の暦の女神である「ヘラの<sup>しやく</sup>笏のてっぺんには春のシンボルとしてのカッコウがついていた」<sup>17</sup>というフリースの言葉が示すように、北国のヨーロッパ人にとって、4月に渡来してくる渡り鳥のカッコウは、待ちわびた春を象徴する喜びの鳥である。そして、英文学の中で「春告げ鳥」としてのカッコウ賛歌と言え、誰も即座に思い浮かべるのは、あの詠み人知らずの叙情詩である。これは「現存する、英語バラッドの中では最古のもの」<sup>18</sup>であり、長くイギリス人に愛唱されてきた祝い詩<sup>うた</sup>である。具体的に見てみよう。

Cuckoo Song（凡そ1225年から1250年の間<sup>19</sup>に作られた作品）

Summer is icumen in,

Lhude sing cuccu!

Groweth sed, and bloweth med,

Summer is come in,

Sing loudly, cuckoo!

The seed grows, and the meadow blossoms,

And springth the wude nu —  
Sing cuccu!

Awe bleteth after lomb,  
Louth after calve cu;  
Bulloc serteth, bucke verteth,  
Merie sing cuccu!

Cuccu, cuccu!  
Well singes thu, cuccu!  
Ne swike thu naver nu.  
Sing cuccu, nu, sing cucu!  
Sing cuccu, sing cuccu, nu!<sup>20</sup>

(夏が来た、  
声高らかに歌え、カッコウ！  
種は萌え、野には花咲き、  
森は今芽をふく。  
歌え、カッコウ！

雌羊は小羊の後ろでメーとなき、  
雌牛は子牛の後ろでモーとなく。  
雄牛は跳ね、雄鹿は放屁する。  
たのしく歌え、カッコウ！

カッコウ、カッコウ！  
さすがだ、カッコウ！  
休むことなく歌え。  
歌え、カッコウ、もっと歌え、カッコウ！  
歌え、カッコウ、歌え、カッコウ、もっと！)

And now the wood springs —  
Sing cuckoo!

The ewe bleats after her lamb,  
The cow lows after her calf;  
The bullock frisks, the buck breaks wind,  
Sing merrily, cuckoo!

Cuckoo, cuckoo!  
Thou singest well, cuckoo!  
Mayest thou never cease now.  
Sing cuckoo, now, sing cuckoo!  
Sing cuckoo, sing cuckoo, now.

読んで字のごとくに詩の意味は単純明快であるが、ただ1カ所だけ気になる1語がある。冒頭の“Summer”である。というのも、カッコウが正真正銘の「春告げ鳥」であるとするなら、ここは“Summer”ではなく“Spring”とならなければならないからである。これは何故であろうか。それを解く鍵は、この詩が作られた13世紀のイギリスでは、1年は4季ではなくsummerとwinterの2季で分割されていた、という点にある。つまり、当時のイギリス人たちは1年を「暖かい半分」と「寒い半分」の二つに分け、前者をsummer、後者をwinterと呼んでいたのである。<sup>21</sup> OED<sup>22</sup>によれば、英語古文書の中でspringという言葉が最初に登場するのは1547年頃である。と見てくれば、上記の詩の冒頭部は正確には「春が来た」と訳すべきであろうが、(1)イギリスでは夏が「一年を通じて最も快適な季節」<sup>23</sup> であること、(2)この国で「夏といえば、普通には5、6、7の3ヶ月をさすこと」<sup>24</sup>、(3)イギリスにカッコウが渡来してくるのは「4月の第2、3週目であること」<sup>25</sup>、等々を思い見るとき、この国の人々が“Summer is icumen in”を「夏が来た」と訳してきたのもむべなるかなである。事実、すでに見た西洋版の『野と森の鳥』の著者は「イギリス諸島では、カッコウは

夏の訪問者である」と述べている。でも、それはこの博物学者の詩心を示すものであろう。ちなみに、我が国で春と言えば、古来旧暦の1月、2月、3月、「厳密に言うと、2月4日ごろの立春から、5月5日ごろの立夏の前日まで」<sup>26</sup>であることを思い見るとき、“Summer is icumen in”は文字通り「夏が来た」と訳した方がよいのであろうが、心情的・文学的には「春が来た」と訳したいところである。では次に、これ以外の英詩について見てみよう。英文学の中で「春告げ鳥」としてのカッコウ賛歌と言えば、我が国でもよく知られている有名な詩がある。ワーズワースの To the Cuckoo (1803年) である。具体的に見てみよう。

O Blithe new-comer! I have heard,  
I hear thee and rejoice.  
O Cuckoo! shall I call thee Bird,  
Or but a wandering Voice?

While I am lying on the grass  
Thy twofold shout I hear;  
From hill to hill it seems to pass  
At once far off, and near.

Though babbling only to the vale,  
Of sunshine and of flowers,  
Thou bringest unto me a tale  
Of visionary hours.

Thrice welcome, darling of the Spring!  
Even yet thou art to me  
No bird, but an invisible thing,  
A voice, a mystery;

The same whom in my schoolboy days  
I listened to; that Cry.  
Which made me look a thousand ways  
In bush, and tree, and sky.

To seek thee did I often rove  
Through woods and on the green;  
And thou wert still a hope, a love;  
Still longed for, never seen.

And I can listen to thee yet;  
Can lie upon the plain  
And listen, till I do beget  
That golden time again.

O blessed Bird! the earth we pace  
 Again appears to be  
 An unsubstantial, faery place,  
 That is fit home for Thee!<sup>27</sup>

(おお、たのしき<sup>しんらい</sup>新来の<sup>まろうど</sup>賓客、  
 かつて汝が歌きき、今ききて嬉し。  
 おお、郭公、われ汝を鳥とや呼ばん、  
 或いはたださ迷える声と呼ばん。

草の上に身を横たえつつ、  
 汝が二重の声を聞く。  
 同時に遠くまた近く、  
 丘より丘へと過ぎるらし。

日光と花の<sup>なより</sup>消息を、  
 覚<sup>おぼ</sup>東なく谷に伝うれど、  
 汝が歌きけば、夢おおき  
 昔のことを思い出す。

よくぞ来し、春の<sup>ちようじ</sup>寵児よ!  
 今もなお汝はわれには、  
 鳥ならず、ただ見えざるもの、  
 一つの声、一つの神秘。

ま<sup>ま</sup>な<sup>な</sup>び<sup>び</sup>舎<sup>や</sup>に通いし<sup>かよ</sup>ころに、  
 耳<sup>かみ</sup>傾けしはまさにその声。  
 歌の主を求めて、<sup>くも</sup>叢に、<sup>き</sup>木に、<sup>そら</sup>空に、  
 彼方こなたと見廻わしぬ。

汝をたずねていく度か、  
 森を野原をさまよひし。  
 汝はいつもわが希望、わが愛、  
 いつも<sup>わか</sup>懂がれしも、姿は見えざりし。

されどわれ今なお汝を聞く。  
 草原に臥して汝が声きけば、  
 楽しかりし想い出は、  
 そぞろに胸に湧き出ずる。

おお、さち多き鳥よ、  
 われらが歩くこの土地は、

汝にふさわしき住家なる  
幻の国と再び思わるる。)<sup>28</sup>

詩人はカッコウのことを“a wandering Voice”（さ迷える声）、“an invisible thing”（見えざるもの）、“a mystery”（一つの神秘）と呼んでいるが、これらの言葉を理解するには、今少しこの鳥とその鳴き声について述べる必要がある。最初に、カッコウとは、その鳴き声ゆえに天下に名を知られた有名鳥である。にもかかわらず、＜声はすれども姿の見えない鳥＞であることは、我が国のみならず、西洋でも同様である。「カッコウは声は聞こえるけれども姿は見えない鳥である」<sup>29</sup> というジャン＝ポール・クレベールや「カッコウは……その姿が見られることはほとんどない」<sup>30</sup> という川和高斌の言葉は、その確かな証左である。次に、カッコウの鳴き声は「2～3キロの遠くまで鳴りひびく」<sup>31</sup> ほど大きいというのに、音の遠近が実に不明瞭である、という特性を持つ。というのも、「鳴くときはつばさをいくぶん下げて、鳴きながらからだの向きをたえず変えている」からである。「だから、その声は四方八方によく響きわたる」<sup>32</sup> のである。換言すれば、「鳴き声はすぐ間近に聞こえても実は丘の頂上の木の枝とか、かなり高い木の梢に止まっている」<sup>33</sup> 摩訶不思議な春の鳥、それがカッコウである。と見てくれば、ロマン派の自然詩人ワーズワースが、声はすれども姿は見えず、昔懐かしい、カッコウ科ナンバー・ワンの「春の使者」、カッコウのことを「たのしき新来の賓客」、「春の寵児」、「さち多き鳥」と歓迎し祝福しながら、同時に「さ迷える声」、「見えざるもの」、「一つの神秘」と呼んでいるのも首肯できよう。

### （三）

とはいえ、カッコウとは両義的な鳥、つまり喜ばしい「春告げ鳥」である反面、厭わしい「托卵鳥」でもある。換言すれば、前者ゆえに「春」の象徴とされる吉鳥ではありながら、同時に後者ゆえに「寄生と姦通のシンボル」<sup>34</sup> とされる凶鳥でもある。この托卵鳥としてのカッコウの負の姿を如実に反映しているのがシェイクスピアの作品である。最初に、『リア王』の1幕4場で道化が語る言葉、“The hedge sparrow fed the cuckoo so long, / That it had its head bit off by its young.”<sup>35</sup>（小鳥が郭公の雛孵し、あんまり長く養って、とうとう首を食切られた）<sup>36</sup> は、この非凡な劇作家がカッコウとは忌々しい托卵鳥であり、「寄生」のシンボルに似つかわしい凶鳥であることを熟知していたことの証左である。というのも、カッコウの雛は仮親の卵や雛を冷酷無情に巣から排除した後、「自分よりもはるかに小さい仮親から給餌されて成長していく」<sup>37</sup> 「生まれながらの暴君」<sup>38</sup> であり、仮親が「必死になって働いても、この暴君は満腹を知らない」<sup>39</sup> ほど食欲旺盛であるからである。日に日に図体がでかくなる巨大な大食漢の「暴君」と、その大きく開けた赤い口に小さな頭を突っ込んで、ひたすら給餌に奮闘する哀れな小鳥。その痛々しい給餌の姿から連想するのは、まさしくシェイクスピアの言葉そのものである。カッコウの雛は、巣立ちするやいなや、大恩ある仮親鳥には一片の敬意も関心も払うことなく、ただちに南方へと飛び去ってゆく不義理な鳥でもあることを付け加えておきたい。

仮親の子供を巣から排除、抹殺し、おのれ独りがぬくぬくと肥え太ってゆく、氏も素性も分からぬ卑しい冷血漢のカッコウ。この「寄生」のおぞましさを、より詳しく、的確に描いているのがエミリー・ブロンテの『嵐が丘』である。もともと捨て子であったヒースクリフについて、語り手のロックウッドと家政婦のデーンは次のような言葉を交わしている。

“He must have had some ups and downs in life to make him such a churl.

Do you know anything of his history?”

“It’s cuckoo’s, sir — I know all about it: except where he was born, and who were his parents, and he got his money, at first. And Hareton has been cast out like an unfledged dunnock!<sup>40</sup>

(「ああひどい守銭奴しゅせんぬになったというのは、いろいろ人生の浮き沈みを味わってきたからだろうな。あの男の生いたちをいくらかでも知ってるかい？」

「知ってますとも、すっかり — まあよその巣を横取りするカッコウ鳥みたいなものでしてね。ただどこで生まれ、親がだれで、最初の金をどこでもうけてきたのか、それだけはわかりませんが。ヘアトンなんぞ、まだ羽もはえそろわぬ岩ひばりみたいに追い出されてしまっ！」)<sup>41</sup>

では次に、「姦通」のシンボルとしてのカッコウについて見てみよう。『恋の骨折り損』の5幕2場に以下の言葉が見られる。

When daisies pied and violets blue  
 And lady-smocks all silver-white  
 And cuckoo-buds of yellow hue  
 Do paint the meadows with delight,  
 The cuckoo then, on every tree,  
 Mocks married men; for thus sings he,  
 Cuckoo;  
 Cuckoo, cuckoo: O word of fear,  
 Unpleasing to a married ear!

When shepherds pipe on oaten straws,  
 And merry larks are ploughmen’s clocks,  
 When turtles tread, and rooks, and daws,  
 And maidens bleach their summer smocks,  
 The cuckoo then, on every tree,  
 Mocks married men; for thus sings he,  
 Cuckoo;  
 Cuckoo, cuckoo: O word of fear,  
 Unpleasing to a married ear!

和田勇一訳

(<sup>まだら</sup>斑ひな菊、青色のすみれ、  
 銀の様に白いたねつけ花に、  
<sup>こがね</sup>黄金色した、きんぼうげが、  
 牧場を、楽しく、彩ると、  
 かつこう鳥めが、どの木にもとまり、  
 女房持ちの男を、からかって歌うよ。  
 カッコオ!  
 カッコオ、カッコオ、ああ、いやな言葉だ。  
 女房持ちには、さぞ、耳ざわり!



羊飼いたちゃ、麦わら笛、鳴らし、  
 耕す人には、雲雀が時計、  
 きじ鳩、みやま鳥、小鳥は番い、  
 娘たち、夏の肌着を晒しや  
 かつこう鳥めが、どの木にもとまり、  
 女房持ちの男を、からかって歌うよ。  
 カッコオ！  
 カッコオ、カッコオ、ああ、いやな言葉だ。  
 女房持ちには、さぞ、耳ざわり！)<sup>42</sup>

小田島雄志訳

（まだらな雛菊、紫スマレ  
 色のタネツケバナに、  
 黄金色したキンポウゲなどが、  
 色とりどりに牧場を飾ると、  
 そこここの木でカッコウドリが  
 寝とられ亭主をばかにして歌う、  
 カッコー、  
 カッコー、カッコー、カッコー悪いと  
 言われちゃ亭主はつらからう。

羊飼いの子が麦笛を吹き、  
 ヒバリの歌が農夫を起こし、  
 鳩やカラスや小鳥がつがい、  
 娘が夏の肌着をさらすと、  
 そこここの木でカッコウドリが  
 寝とられ亭主をばかにして歌う、  
 カッコー、  
 カッコー、カッコー、カッコー悪いと  
 言われちゃ亭主はつらからう。)<sup>43</sup>

女房持ちの男にとってカッコウの鳴き声の不愉快に聞こえるのは、カッコウとは「姦通のシンボル」、具体的に言えば「妻を寝とられること」<sup>44</sup>を意味するからである。この象徴的意味を有する“cuckoo”に軽侮的接尾語の“old = ault”合体させて作られたのが「妻を寝とられた男」を意味する“cuckold”<sup>45</sup>である。確かに<人目>を忍んで他の鳥の巣を訪ねる雌カッコウの姿は<不貞そのもの>であり、加えて、いわゆる「カッコウ」、「カクコウ」と鳴くのは雄のみである。だとすると、雄のカッコウは比喩的には「不貞の妻の夫」ということになり、ここから「カッコウ」に上記の象徴的意味が付与されるのも理解できる。

とはいえ、カッコウとは、あくまでも「被害者」ではなく「加害者」である。この点を考えれば考えるほど、カッコウに関する象徴的意味には合点がゆかなくなる。そこで「姦通」と「托卵性」という二つのキー・ワードを手掛かりにカッコウの象徴的意味について改めて考えてみたい。

## (四)

最初に、姦通とは「男女が不義の交わりを結ぶこと。特に、夫のある女が他の男と関係すること」<sup>46</sup>である。したがって、姦通にまつわる人物は「不貞の妻」と「妻を寝とられた男」と「姦夫」からなる。言うまでもなく、被害者は「妻を寝とられた男」であり、加害者は「不貞の妻」と「姦夫」である。次に、托卵性とは、換言すれば、「育児は他人まかせ」<sup>47</sup>ということであり、この点はアリストテレスの『動物誌』にも記述があるほど古の時代からよく知られていたことである。この哲人は同書の中で「カッコウの雛は誰も見たことがないといわれている。カッコウも卵を産むには産むが、巣を造らずに産むのであって、ときには自分よりも小さい色々な鳥の巣の中に、その鳥の卵を食ってから、卵を産むこともあるが、特にモリバトの巣の中に、やはりその卵を食ってから、産むのである。たまには二個産むが、たいていは一個である。ヒュポライスの巣にも産む。この鳥がかえして育てあげるのである」<sup>48</sup>と述べている。

と見てくれば、人間界でカッコウの役を演じているのは「妻を寝とられた男」ではなく「姦夫」の方である。というのも、「姦夫」は我が子に対して<育児も養育も全く他人まかせの無責任な冷血漢>であるからである。したがって、雌雄を問わず、カッコウの象徴的意味として最も相応しいのは「姦夫」である。事実、古代の西洋人の間では「カッコウ=姦夫」の意味であった。『ブルーワー英語故事成語大辞典』は「ローマ人は……姦夫のことをカッコウと呼んでいた」<sup>49</sup>と述べているが、『シェイクスピアの鳥類学』には更に詳しい記述が見られる：「古代のギリシア人やローマ人は、より正確に、不貞の妻の夫ではなく、まさしくカッコウの役を演じているとみられる姦夫に対してカッコウという名をつけた。妻を寝とられた夫に対しては、いつもカッコウの卵を巣の中に産みつけられる鳥の名前——コノドジロムシクイ (curruca)——をつけた」<sup>50</sup>。では何故にカッコウに関する象徴的意味が「加害者」から「被害者」の側へと移ったのであろうか。この点について『シェイクスピアの鳥類学』の著者ハーディング (1841-1928) は「古代から中世へ移行する過程で、どうして<カッコウ>の意味が姦夫側から妻を寝取られた男の側に移ったのか全くはっきりしていない」<sup>51</sup>と述べているが、ジョンソン博士 (1709-84) の『英語大辞典』には興味ある解説が見られる。彼は「カッコウ」の項目で次のように述べている。

A bird which appears in the Spring; and is said to suck the eggs of other birds, and lay her own to be hatched in their place; from which practice, it was usual to alarm a husband at the approach of an adulterer by calling cuckoo, which, by mistake, was in time applied to the husband.<sup>52</sup>

(春に現れる鳥：他の鳥の卵を飲み込んで、その代わり、自分の卵を産みつけて孵化させる、と言われていた。この手口から、姦夫が近づくと人は「カッコウ」と叫んで夫に警告するのが常であったが、それがやがて誤って夫に適用されるようになった。)

ジョンソン博士の解説は明快そのものである。しかし、この「間違い」が広く世間に受け入れられていった背景には、時代の明るさとともに、カッコウに関する今一つのイメージ、つまり「カッコウ=間抜け」という根深い見方が預かって力があつたのではなからうか。というのも、カッコウは「4月の鳥」であり、4月と言えば、誰しも「エープリル・フル (4月馬鹿)」を連想するからである。フリースの『イメージ・シンボル事典』は、「エープリル・フル」の項目で「4月とともにカッコウが現れる。カッコウは愚者のエンブレムである」<sup>53</sup>と述べている。カッコウが間抜

け鳥であるとするなら、この鳥の象徴的意味として、より相応しいのは「姦夫」ではなく「妻を寝とられた男」の方である。事実「カッコウの愚かな性質を人にも当てはめ、不貞な妻を持つ夫を指して＜女房を寝とられた男＞（cuckold）などという表現も生まれた」<sup>54</sup> という指摘もあるが、シェイクスピアの作品に＜妻を寝とられた間抜け亭主＞を「姦通」を象徴する間抜け鳥のカッコウに結びつけて、前者を徹底的に揶揄している場面がある。『夏の夜の夢』、3幕1場である。

The finch, the sparrow and the lark,  
The plain-song cuckoo gray,  
Whose note full many a man doth mark,  
And dares not answer nay; —  
for, indeed, who would set his wit to so foolish  
a bird? who would give a bird the lie, though he cry  
'cuckoo' never so?

平井正穂訳

（うそに雀にあげ雲雀  
郭公の声は味気ない、  
その声聞くやつは数多<sup>あまな</sup>といるが、  
嘘だといえないやつばかり。

だって、そうじゃないか。郭公鳥みたいなあんな馬鹿な鳥にたてつくやつはいないもんな。あの鳥が「カッコウ」といくらわめいても、嘘つきめと言える亭主はまずいねからな。<sup>55</sup>

小田島雄志訳

（鶯<sup>うす</sup>に雀に揚げヒバリ、  
同じ調子のカッコウ鳥、  
カッコウ悪いと鳴くけれど、  
寝とられ亭主声もなし。

そりゃまあ、あんな阿呆な鳥と阿呆ぶりをくらべたってしょうがないやな。いくら「寝とられ亭主はカッコウ悪い」と鳴かされたって、鳥にむかってとりちがえるなど言うわけにはいかん。<sup>56</sup>

三神勲訳

（うそに雀にあげひばり、  
一本調子のかっこ鳥、  
女房浮気と鳴くけれど、  
亭主聞いても知らん顔。

そりゃそうだろう、ばかな鳥をつかまえて文句を言うやつがどこにいるもんか。寝とられ亭主ってあいつがいくらわめいたからって、鳥を相手に喧嘩してもはじまらねえからな。<sup>57</sup>

「シェイクスピアがカッコウについて16回述べる間に、なんと40回も寝とられ亭主のことが話に上がる」<sup>58</sup> ことを考えれば、この偉大な文人にとって、寝とられ亭主と言えば、まず第一に間抜け鳥のカッコウのことを思い浮かべたに違いない。とはいえ、カッコウとは＜他人の家庭＞を破壊し、

「育児は他人まかせ」の冷酷無情な「加害者」であり、凡そ「間抜け」などとは程遠い鳥である。にもかかわらず、シェイクスピアはカッコウのことを“so foolish a bird”と述べ、フリースは「カッコウ＝“extreme foolishness”（極端な愚かさ）の象徴」<sup>69</sup>と記述している。この点について「古くからカッコウに結びつくもうひとつのイメージは、<カッコウはたとえ千年生きても、カッコウという言葉しか覚えないだろう>という嘲笑に代表されている。諺でもカッコウは自分で自分の名前を呼ぶ>といわれるが、これも無知で高慢で、自分で自分の欠点をふれまわる愚か者のイメージである」<sup>69</sup>という指摘があるが、すでに見たエープリル・フールの観点から今少し掘り下げて考えてみたい。

#### (五)

エープリル・フールズ・デー（万愚節＝いたずら御免の4月1日）の起源に関しては諸説があるにしても、エープリル・フールとは“one who is sent on a bootless errand, or otherwise sportively imposed upon, on the first of April”（万愚節に無駄な使い走りによられたり、またはまんまとかつがれた人 [OED]）のことである。その間抜けな愚者を象徴するのがカッコウである。スコットランドでは「愚者」のことを「4月のカッコウ」と呼ぶようであるが、この点に関してフリースは「カッコウ＝4月馬鹿」と明確に記述し、しかも一つの興味ある諺を紹介している。それは、“On the first of April Hunt the gowk [cuckoo] another mile.”<sup>61</sup>（4月1日にはカッコウをもう一マイル追え）というものである。以上の点を踏まえた上で、上記の諺を手掛かりとして、何故にカッコウが「愚者のエンブレム」になったのか、という点について考えてみたい。

ワーズワースの詩の解説箇所でも触れたように、カッコウとは、その鳴き声ゆえに大層有名な鳥である。にもかかわらず、<人目>を忍ぶ身の上ゆえか、<声はすれども姿は見えない鳥>であり、加えて、その声は一体どこから聞こえてくるのか定かでないほど音の遠近が実に不明瞭である。桂冠詩人の指摘にもあるように、「同時に遠くまた近く」で聞こえるからである。だとすると、こんな幻の鳥をいくら熱心に探してみても、無駄足に終わるのは火を見るよりも明らかである。事実、英語で「カッコウを探す」（“to hunt the gowk”）と言えば、「無駄足をする」（“to go on a fool's errand” [OED]）という意味である。この点に関して加藤憲市は『英文学動物ばなし』の中で次のように述べている。

スコットランドではカッコウを ‘gowk’ と呼び、4月馬鹿 (April fool) のいたずらとして「カッコウ狩り」(‘hunting the gowk’) という風習がありました。4月1日に手紙を持たせて人を使いに出しますが、その手紙には This is the first day of April, / Hunt the gowk another mile. (今日は4月1日ですから、このトンマをもう一マイル走らせてください) としか、書いてありません。それとも知らぬこの ‘gowk’、忠実に遠路、息せき切って手紙を届けますが、名宛人も人がわるい。手紙を読み終えると、まことしやかに同じ文面をしたためて、第二の名宛人へ走らせる。こうしてカッガれたことも知らずに、転々と第三、第四……の届け先へ走らされて、ヘトヘトに疲れた使者を「4月のカッコウ」(‘April gowk’) と呼び、それを笑いものにするという、凝った趣向でした。‘cuckold’, ‘gowk’, ‘cuckoo’ の語は、いずれも、ときに「とんま、間抜け」の意味に使われます。<sup>62</sup>

と見てくれば、スコットランド版の万愚節の世界で実際に「間抜け」の役を演じていたのは、「4月のカッコウ」ではなく、一杯食わされて、この姿なき声の鳥を必死で追い求めた愚者であることは自明である。にもかかわらず、カッコウがその愚者の象徴となったのは、<彼奴はカッコウを探

し回った大馬鹿者だ」という表現がいつの間にかく彼奴はカッコウだ」という陰で人を揶揄して楽しむのに大層都合な隠喩的表現へと切り替わっていったからではなからうか。だとするなら、カッコウは、ここでも、まんまと「加害者」の側から「被害者」そのものへと上手く立ち回っている、と言えよう。どうもカッコウは変化自在に変身する得体の知れない鳥のようであるが、そう思われても仕方あるまい。なにしろ、カッコウとは東西一流の桂冠詩人をして「一つの神秘」と言わしめたほどく声はすれども姿は見えない摩訶不思議な鳥なのだから。ギリシア神話の大神ゼウスがヘラを拐かした時にカッコウに変身した<sup>65</sup>というのも合点がゆこう。

以上見たように、カッコウの負のイメージは「姦夫」、「寝取られ亭主」、「間抜け」と散々である。「汝姦淫するなかれ」がモーセの十戒の一つに含まれていることを思い見るとき、ヘブライズムの世界ではカッコウが「忌むべきもの」、つまり食してはならない不浄の鳥と定められているのも納得できる。「春告げ鳥」としての世俗的名声の裏に秘められた闇の姿を知ってか知らずか、古のユダヤ人たちがカッコウを「忌むべきもの」として一蹴しているのは注目に値する。というのも、これこそが実に厭わしく、また極めて特異な習性を有する托卵鳥、カッコウに対する正当的な評価と言えるからである。ちなみに、『聖書』全体の中でカッコウについての言及があるのは、「レビ記」11章16節と「申命記」14章15節の2カ所のみで、いずれも「忌むべきもの」としてである。参考までに「レビ記」の11章13節から19節までを下に引用しておく。

- 13 And these are they which ye shall have in abomination among the fowls; they shall not be eaten, they are an abomination: the eagle, and the ossifrage, and the ospray,  
14 And the vulture, and the kite after his kind;  
15 Every raven after his kind;  
16 And the owl, and the night hawk, and the cuckow, and the hawk after his kind,  
17 And the little owl, and the cormorant, and the great owl,  
18 And the swan, and the pelican, and the gier eagle,  
19 And the stork, the heron after her kind, and the lapwing, and the bat.<sup>64</sup>

(13 また、鳥のうちで次のものを忌むべきものとしなければならない。これらは忌むべきもので、食べてはならない。すなわち、はげわし、はげたか、黒はげたか、

- 14 とび、はやぶさの類、  
15 鳥の類全部、  
16 だちょう、よたか、かもめ、たかの類  
17 ふくろう、う、みみずく、  
18 白ふくろう、ペリかん、野がん、  
19 こうのとりの類、やつがしら、こうもりなどである。)<sup>65</sup>

#### (六)

以上イギリスを中心にカッコウにまつわるイメージやシンボルについて色々見てきたが、同じ英語国民であるアメリカ人は、この鳥に対して如何なるイメージを有しているのだろうか。それについて考えてみたい。最初に指摘しておきたいことは、北米合衆国には、いわゆる「カッコウ」、「カッコウ」と鳴く托卵性の鳥はいないということである。この点について、『オデュボーン協会北米の野鳥案内』は “. . . six in North America . . . Unlike their European relatives, American cuckoos are not nest parasites.”<sup>66</sup>（北アメリカにいるカッコウ科の鳥は6種で……この6種は、ヨーロッパのカッコウ科鳥とは異なり、托卵性を有しない）と述べている。にもかかわらず、アメ

リカ文学に「カッコウ」が重要な脇役を務める作品があるのは、アメリカ人の大半がヨーロッパから渡って来た移民の子孫であり、カッコウとは世界的に名を知られた有名鳥であるからであろう。

アメリカ文学の中で、我が国でもよく知られている、カッコウと結びつく作品と言えば、アーサー・ローレンツの『カッコウが鳴く頃 (The Time of the Cuckoo)』(1952)とケン・キージーの『カッコウの巣 (One flew over the Cuckoo's Nest)』(1962)ではなかろうか。最初に、前者は初夏のベニスを舞台に、人生に潤いを求めてアメリカから観光に訪れた中年の独身女性を主人公として、愛することの喜びと悲しみを叙情性豊かに描くものであるが、キャサリン・ハップバーン主演で映画化(日本語名は『旅情』)され、たいへん好評を博したので、ご記憶の方も多であろう。作品の舞台設定と内容を思い見るとき、作者が表題に「カッコウ」の文字を入れたのは意味のないことではあるまい。というのも、「春告げ鳥」のカッコウとは、換言すれば、愛の季節の到来を告げる鳥でもあるからである。つまり、カッコウの鳴き声とともに、自然界は愛の季節を迎えるのである。事実、フリースによれば、カッコウとは「愛の鳥」<sup>97</sup>でもある。

次に、後者の『カッコウの巣』はオレゴン州のある精神病院を舞台に、インディアンと白人の混血で狂人のブルーム・プロムデンが語る世にも「恐ろしい話」<sup>98</sup>を通して、比喩的に「おぞましい現代社会の悪夢的状况を提示する」<sup>99</sup>一種の幻想小説であり、ブラック・ユーモア派の文学を代表する作品である。最初に、本作品を<幻想小説>と見なすのは、語り手のプロムデンが精神異常者であるが故に、「彼の語りには、幻想と現実が自由に混じり合い、どこまでを現実、どこまでを幻想というように区別することはできない」<sup>99</sup>からである。次に、研究社の『英米文学辞典』によれば、ブラック・ユーモアとは「不気味で、グロテスクで、残酷」なユーモアのことであり、「この<黒いユーモア>の底には、鋭い風刺精神、徹底した現実批判ないしは否定、現実の戯画化、パロディ化、虚無思想などが横たわっており、現代社会の不条理性、狂気、混乱、非人間性などに対して残された文学者の唯一の抵抗手段(である)」<sup>100</sup>という。と見てくれば、本作品に登場するカッコウとは北米産のカッコウではなく、「不気味で、グロテスクで、残酷」な托卵性という奇習を有する「ヨーロッパ・カッコウ」でなければならないのは自明である。その点について詳しく見てみよう。

最初に、「カッコウ」は北米には居ない鳥であるにしても、本作品が一種の幻想小説として設定されている以上、作者がこの有名鳥を重要な脇役として利用していることに異議を唱える人は誰もおるまい。次に、托卵鳥とは、換言すれば、自らの巣を造らない鳥である。とするなら、作者の言う「カッコウの巣」とは一体いかなる意味なのであろうか。素直にとれば、「カッコウの巣」という言葉自体<幻想小説>の表題に入れるのに誠に相応しいものである。しかし、「カッコウの巣」をカッコウに托卵される仮親鳥の巣と取るとき、それは作品の内容そのものに相応しいものとなる。というのも、本作品は無情な現代社会の管理体制とその体制のもとで苦悩する無力な人間の姿を描くものであり、比喩的に見れば、仮親鳥の巣を舞台にカッコウの雛、つまり巨大な「暴君」が演じる荒地的世界と見事に重なり合うからである。作者が「カッコウの巣」という言葉に不定冠詞ではなく、定冠詞をつけているのは意味のないことではあるまい。第三に、語り手役のインディアンは幼時に祖母から聞いた童歌を回想して「チン。チングル、チングル、震える足指よ。彼女は上手な魚取り。雌鶏おさえ、小屋に入れ……針金しばって、鍵をかけ……三羽の雁が群になり……一羽は東に飛んでいき、一羽は郭公の巣の上を飛んでいった……OUTという文字がはっきりと綴られる……雁が急に降りてきて、お前を外にくわえ出す……わたしは雌鶏をおさえるチングル・チングル・タンゲルという女が嫌いだ。その女が大嫌いだ。わたしは郭公の巣の上を飛んでいくあの雁が好きだ。その雁が大好きだ」<sup>102</sup>と述べている。と見てくれば、作者の言うカッコウとは托卵鳥の「カッコウ」であることに間違いはあるまい。巨大な「暴君」に放り出される哀れな、仮親鳥の卵や雛のように、

インディアンは常に白人主導の強大な管理体制から冷酷無情に虐げられ、排除されてきたからである。その悪夢的な状況から彼らを救い出してくれるもの、それが「お前を外にくわえ出す」雁である。この救助者としての雁を付け加えたところに、本作品のロマンがあり、他のブツラク・ユーモア派の作家たちとは異なるケン・キージーの特質がある。<sup>73</sup>

以上見たように、西洋の神話や『聖書』や文芸の世界に登場するカッコウの姿は実に多種多様であるが、それというのも、この鳥は鳴き声ゆえに人口に膾炙している名鳥とはいえ、表の世界と裏の世界では全く対照的な二つの顔<sup>がしや</sup>を有し、しかも、己の姿を人前にさらすことなく、他の鳥のみならず人間をも巧妙に欺く曲者鳥<sup>くせもの</sup>であるからであろう。曲者鳥とは、換言すれば、自由自在に変身する油断も隙もない鳥であり、また立ち回りの上手な鳥のことである。それは、日本語の「ハト時計」を英語で言えば cuckoo clock であることや、我が国の信号機で「安全」を知らせる青信号の音声として、この鳥の鳴き声が採用されていることなどを見ても明らかである。「春告げ鳥」と「托卵鳥」を兼ね備え、天下に名を知られたく姿なき声の鳥<というカッコウの特質と、この鳥がイメージやシンボルの世界で演じている多種多様な役割を思い見れば、「カッコウ」とは人間にとって極めて身近な鳥でありながら、人によって自由自在にその姿を変えるのも何ら驚くべきことではあるまい。「目には青葉山ほととぎす初鯉」<sup>74</sup> という素堂の句や「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」<sup>75</sup> という芭蕉の句は奇しくも、その一端を示す証左と言えよう。洋の東西を問わず、鳥が主役や脇役を務める文芸の世界をより深く理解するには、その鳥に関する諸々の知識が必要不可欠であることは言うまでもなからうが、とりわけカッコウは、その思いを強くする鳥であることだけは確かである。

## 注

- 1 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学——日・英・米の文学にあらわれる鳥——』（大修館書店、1982）31.
- 2 荒俣宏は『世界大博物図鑑』第4巻〔鳥類〕（平凡社、1987）の212頁で「最近までは科名もホトトギス科となっていた。しかしヨーロッパではこのなかま全体を<カッコウ>とよぶのでまぎらわしく、近年になってカッコウ科というようになった」と述べているが、山階芳麿による『世界鳥類和名辞典』（大学書林、1986）もホトトギス科を改めカッコウ科としている。
- 3 『朝日＝ラールス 世界動物百科（鳥類）』第96号（朝日新聞社、1972）19.
- 4 山階芳麿、210-221を参照。
- 5 『朝日＝ラールス 世界動物百科（鳥類）』第96号 12.
- 6 英語による学名は上記の『世界鳥類和名辞典』（211-212）による。
- 7 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子、226を参照。
- 8 *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Stepanek (London: Spring Books, 1965) 118.
- 9 小林桂助『標準原色図鑑全集 第5巻 鳥』（保育社：1974）41.
- 10 ジャン＝ポール・クレペール『動物シンボル事典』竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦／アラン・ロシェ訳（大修館書店、1971）101.
- 11 『朝日＝ラールス 世界動物百科（鳥類）』第96号 12.
- 12 井上義昌編『英米風物資料辞典』（開拓社、1971）246.
- 13 『朝日＝ラールス 世界動物百科（鳥類）』第96号 20. 詳しい観察記録としては、ハドソンの *Hampshire Days* (New York: Ams Press, 1968) の 'A cuckoo in a robin's nest' (13-23) を参照。
- 14 同上 12.
- 15 同上 12.
- 16 同上 14.
- 17 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛訳（大修館書店、1984）156. 7

- リースは同書の476頁で「春を告げるカッコウと対照をなす鳥」は「冬、つらい時期を表す」フクロウである、と述べている。
- 18 James E. Harting, The Ornithology of Shakespeare (Old Working, Surrey: Gresham Books, 1978) 155: “. . . [this] ballad is considered to be the earliest in the English language now extant.”
- 19 George B. Woods, gen. ed., A Literature of England: An Anthology and a History, revised edition, vol. 1 (Chicago, Atlanta, Dallas, New York: Scott, Foresman and Company, 1941) 166.
- 20 George B. Woods, 167.
- 21 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修、成田成寿編集『英語歳時記(夏)』(研究社、1970) 31を参照。
- 22 The Oxford English Dictionary, 2nd edition on Compact Disc (Oxford University Press, 1994). 以下OEDからの引用文は全てこのCD-ROM版による。
- 23 『英語歳時記(夏)』vii.
- 24 同上 vii.
- 25 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子、31.
- 26 『英語歳時記(春)』xix.
- 27 British Poetry and Prose: A Book of Readings, edited by Paul R. Lieder, Robert M. Lovett and Robert K. Root (Boston: Houghton Mifflin, 1928) 700.
- 28 田部重治選訳『ワーズワース詩集』(岩波文庫、1969) 90-91.
- 29 クレベール、100.
- 30 川和高斌『英鳥詩選』(泰文堂、1971) 47.
- 31 同上 47.
- 32 『朝日＝ラルース 世界動物百科(鳥類)』第96号 14.
- 33 川和高斌、47.
- 34 クレベール、101.
- 35 King Lear (1, 4) in The Complete Works of William Shakespeare: His Plays and Poetry (Creative Multimedia Corporation, 1992). 以下シェイクスピアからの英語引用文は全てこのCD-ROM版による。
- 36 シェイクスピア『リア王』福田恆存訳(新潮文庫、1982) 44.
- 37 『朝日＝ラルース 世界動物百科(鳥類)』第96号 13.
- 38 同上 20.
- 39 同上 20.
- 40 Emily Brontë, Wuthering Heights (Penguin Books, 1961) 44.
- 41 E・ブロンテ『嵐が丘』河野一郎訳(中公文庫、1978) 51.
- 42 『シェイクスピア全集』第1巻 喜劇1 『恋の骨折り損』和田勇一訳(筑摩書房、1985) 212-213.
- 43 シェイクスピア『恋の骨折り損』小田島雄志訳(白水社、1993) 177-178.
- 44 フリース、156.
- 45 小稲義男他編集『新英和大辞典』第5版(研究社、1980) 510.
- 46 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典』第三版(岩波書店、1982) 224.
- 47 『朝日＝ラルース 世界動物百科(鳥類)』第96号 12.
- 48 アリストテレス『動物誌 上巻』島崎三郎訳(岩波文庫、1998) 282.
- 49 E. Cブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』加島祥造主幹、鮎沢乗光編集、鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木慎一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子訳(大修館書店、1989) 445.
- 50 Harting, 154: “. . . the ancients more correctly gave the name of the bird, not to the husband of the faithless wife, but to her paramour, who might justly be supposed to be acting the part of the cuckoo. They gave the name of bird in whose nest the cuckoo's eggs were usually deposited — ‘curruca’ — to the husband.”
- 51 Harting, 154: “It is not quite clear how, in the passage from classic to mediaeval, the application of the term was transferred to the husband.”



- 52 Samuel Johnson, A Dictionary of the English Language (London: Times Books, 1979).  
53 フリース、25.  
54 ピーター・ミルワード『英文学のための動物植物事典』中山理訳（大修館書店、1990）70.  
55 『シェイクスピア全集』第1巻 喜劇1 『夏の夜の夢』平井正穂訳（筑摩書房、1985）235.  
56 シェイクスピア『夏の夜の夢』小田島雄志訳（白水社、1993）61.  
57 シェイクスピア『真夏の夜の夢』三神勲訳（角川文庫、1975）60.  
58 『英文学のための動物植物事典』71.  
59 Ad de Vries, Dictionary of Symbols and Imagery (Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company, 1984) 122.  
60 谷口幸男・福嶋正純・福居和彦『ヨーロッパの森から ドイツ民俗誌』（NHKブックス、1990）129.  
61 フリース、25.  
62 加藤憲市『英文学動物ばなし』（松柏社、1964）128-129.  
63 フリース、156とクレベール、101を参照。  
64 本書に於ける『聖書』からの英語引用文は The Holy Bible, Authorized King James Version (Charlotte・North Carolina: Bible House, 1976) による。  
65 『欽定訳聖書』から引用した英文とその下の和訳には多少意味の異なる箇所があるが、和訳は『聖書 新改訳』（日本聖書刊行会、1970）から参考までに引用したものである。  
66 Miklos D. F. Udvardy, The Audubon Society Field Guide to North American Birds Western Region (New York: Alfred A. Knopf, 1977) 797. 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子、31を参照。  
67 フリース、156  
68 ケン・キージー『郭公の巢』岩元巖訳（富山房、1976）11.  
69 同上 429.  
70 同上 429.  
71 斉藤勇監修、西川正身・平井正穂編集『英米文学辞典』第三版（研究社、1985）122.  
72 キージー、373.  
73 岩元巖『現代アメリカ作家の世界』（リーベル出版、1988）109を参照。  
74 横田正知編『写真俳句歳時記 夏』（現代教養文庫、1982）85.  
75 萩原井泉水『芭蕉名句』（現代教養文庫、1975）104.

平成11年（1999）年10月1日受理

平成11年（1999）年12月27日発行

